東方維形録

そのまた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方維形録

【Ｎコード】

Ｎ６０１９Ｙ

【作者名】

そのまた

【あらすじ】

テンプレっぽい転生物、そんなお話

1話（前書き）

初投稿です、よろしくお願いいたします。

1話

「…はあ！？」

目が覚めたら、自分は森の中にいた。

「ちょ、ちょっとこれどういうことだよ！！？」
なぜこんな場所にいるのかがわからない、俺は確か…あれ？
なんと、目が覚める前のことがまったく思い出せない。
これはまずい、どうしてこうなった！？

「おおおちつけ俺！まずはなぜこんな場所にいるのかを考えなくては！」

さて、なぜ自分はこのようなところにいるのだろうか？
何故か目が覚めたときから立っていたし、周りの木々が大きく見えるし…
とりあえず冷静になった俺は辺りを見回す、やっぱり木、下を見る、生い茂る草、

「…ふむ、何がなんだかまったくわからん。」

とりあえず自分の体に異常がないかを見てみる。
なんだか小さい手、小さい足、服を着ている、そのぐらいだった。
…もしかして体が小さくなってる！？もうわけがわからんね！
そんなことを考えているといきなり頭痛がした。

『おい、聞こえるか？』

その後すぐに声が聞こえた、辺りを見回すが誰もいない。

『落ち着け、今からお前に話したいことがある。』

話したいこと？というか、俺の頭に話しかけてくるこいつはいったい何なんだ？

『こいつとはなんだこいつとは、私は神だ。』

心を読みやがった！？それより神様！？

『そう、神だ、今からお前がどうなったのかを話すから落ち着いて聞いてほしい。』

どうやらこの神様は自分がどうなったのかを教えてくれるらしい、聞いてみることにしよう。

『お前は一度死んだ、そして妖怪に転生するはずだったのだが、こちらの方でミスがあってな、間違えて人間に転生させてしまったのだ。』

つまり俺は妖怪になるはずだったんだけど、間違えて人間にしてしまったということか。

しかし、なぜ森の中にいるのだろうか？

『本来ならそこで妖怪として転生するはずだったんだよ。』

へえそうなのか、しかしなんで子供の姿なのだろうか。

『それがわからないのだ…、しかもお前はこの様子だと一部だけだ

が、前世の記憶まで残っているようだしな。』

わからないのかよ…、まあいいや、それよりいくつか質問していいか？

『別にいいぞ』

まず一つ目だ、妖怪とは何だ？

『妖怪とは人間の恐怖から生まれた生物だ、鬼や天狗などいろいろな種類がいる、長生きしている奴ほど妖力が多くて強い、そういう奴は大妖怪と呼ばれているな。』

なるほど、では二つ目、妖力とは？

『妖怪の力だ、妖怪達はそれを使って妖力弾を出したり、妖術を使ったりする。』

へえそうなのか、じゃあ妖怪になるはずだった俺にも妖力があったりするとか？

『いや見てみたがまったく無いぞ？』

ですよねー

『その代わりにただの人間が持つにしては多すぎるくらいの霊力があるがな…。』

おおうまた知らない言葉が、霊力？、何それすごいの？

『人間が持っている力みたいなものだ、持っている量は人間によって違うが、修行をしたりして増やすことはできる。
霊力弾を出したり、霊力を使って体を強化したりすることができるぞ』

へえ、じゃあ俺にはそんな力がたくさんあるってことだな！
どうやって霊力弾とか出すのだろうか、後で試してみよう。

『他にも魔力に神力があるがお前にはあまり関係ないだろう、後は能力があるが…』

魔力も神力にも興味があるが、能力ってなんだ？

『能力は人間や妖怪が稀にもってる力だ、霊力などとは別だな。」

へえ、能力を使ってどんなことができるんだ？

『～程度の能力といって、能力によってそれぞれ違う効果を持っている、
ちなみに私の能力は考えを司る程度の能力で、私の能力を使ってお前に直接私の考えていることを送っているのだ。』

へえそうなんですか、そんなことよりっ私にも能力とかあるんですかね！？

『口調が変わってるぞお前…お前に能力があるかどうかだが、あるみたいだな。』

おおおっ！ｋｔｋｒ！で、どんな能力なんですか！？教えて神様！

『少し落ち着け…私はどんな能力なのかはわからない、ちなみにどんな能力なのかは突然ふっと頭に思い浮かんだり、目を瞑ったりして能力について考えていると文字が頭に思い浮かんでくるらしいぞ？』

そうなのか！よし早速目を瞑ってうおおお俺の能力は何ですかぁぁぁぁ！！

（形を操る程度の能力）（維持を操る程度の能力）この二つかぁぁぁぁ！

『ずいぶん早いな！？というか二つ能力があるってどういうことだ！？』

え？二つ能力があるって異常なんですか！？じゃあ私は特別な存在なんですね！わかります！

『（うぜえ…）あ、ああ、普通じゃまずありえないことだ、しかしどういうことだ？

人間としての能力と妖怪としての能力が二つともあるということか？』

うおおお俺はすごいぞー！特別だぞー！

『…少し黙れ！』

頭痛ぁい！

『…さて、先ほど話したが、お前は人間の子供となっている。

それに、この森には人を食べる妖怪達がたくさんいる、油断してい

たら食べられてしまうぞ？』

妖怪って人食べるんですか！？俺どうすればいいんですかね！？

『お前にはかなりの量の霊力がある、それと二つの能力がある、それらを使って妖怪たちを倒せ。

…少し長くはなしすぎたな、私は考えを送るのをを終了する、ここからは自分の力で生きていけ。』

あ、ちょっと待って！…あーいなくなってしまったか、

さて、この森の中にいる人間はおそらく俺一人だけ、戦い方とかまったくわからないのに、倒せ…か。

「やるしか、ないかぁ…」

俺は一人でそう呟き、大きなため息をつくのであった。

2話

さて、いきなり森の中にいたり妖怪になるはずだったり能力とか持っていたりする俺だけどこれからどうするか悩んでます。
悩んだ結果、霊力とかいうのをどうやって使うのかいろいろと試してみることにした。
まず最初に霊力弾を撃ってみよう、手を前に突き出して…やあっ！
…やっぱりというべきか、何も出なかった。
さて二つ目の手段、能力とやらが目を瞑って考えていたら出たから、霊力も同じようにすれば出るんじゃね？っていうなんとも安直な考え。
とりあえず座禅を組んで、心を落ち着けて目を瞑って、体の中の霊力を探すような想像をする。
そうしていると真っ暗な空間に白っぽくもやもやとした物が浮かんでいる、これが霊力かな？
そのもやもやとした物を体の外に出すように…それっ！

…おおっ！すげえ、体の中からまるで力が出てくるようだ！
まるでその力が体中にまとわりつくような感じがする。
この状態でなら霊力弾も撃てるんじゃないのか？
そう思いつつ、手を前に出して、この力を手に集めてそこから目の前にある木に向かって発射！

ポンッ

おおおおお！出た！出た出た！何か霊力っぽいものの塊が出てきた！
そしてその塊は木にぶつかって「ドカァァン！」えっ？

…なんと、木の枝が全て跡形も無く消し飛びました。
強すぎたのかなぁ？とりあえず同じ木に向かって同じようにして霊力弾を撃ってみる、
発射した霊力はさっきのよりかなり少なくしたつもりだ。
そしてその霊力弾は木の幹にぶつかった、霊力弾は爆発して、木の幹には手のひらくらいの大きさの穴ができている。

…強いな、とりあえず体の周りの霊力を見てみるが、あまり減っていないようだ。
神様が言ってたとおり、霊力を俺はたくさん持っているらしい。
しかし油断してはいけない、いくら力があったって、使いこなせなければ意味は無いのだ。
さて、次は神様が言っていた方法、霊力で肉体を強化しよう。
といってもどうすればいいかわからない、とりあえず、肉体に霊力を流し込んでみよう。
目を瞑って、霊力を少しづつ体の隅々にいきわたらせていく、使った霊力はさっき撃った霊力より少し多いくらいだ、
そしていきわたらせた霊力をさっき霊力弾を発射したように…それっ！

おお！？なんだかさっきと比べて体が軽いぞ！？とりあえず全速力で走ってみると、
とてもこんな小さい子供が出せないような速度で走ることができた、
うおー！すげー！！
そんなことをしていたらいきなり力が抜けて、速度が落ちていった。
どうやら時間制限があるらしい、大体３０秒ぐらいか…短いな。

次は能力を使ってみよう、まずは形を操る程度の能力のほうだ。
形を操るということは、物の形を変えたりできるのかな？横にある木に触って、

形を変えてみることにする、とりあえず球体にしてみよう。

なんと、さっきまで普通の木の形をしていた木は、
目の前で丸まったりくっついたりしてあっという間に茶色と緑の大きな球ができましたとさ。
こりゃ面白い、しばらくいろんな形に変えたりして遊んでいました。

次は維持を操る程度の能力を使ってみよう、
…といってもこの能力はよくわからないのだ、維持することとか、維持させることができるのか？
何を維持させることができるのかまったくわからない、…そういや霊力で肉体を強化できたんだったな、
その効果が消えないように維持することはできるのか？ちょっと試してみよう。
さっき使った量よりもっと多くの霊力を使って…うおうっ！？
ななななんと！体が軽いとかそういうレベルじゃない！ありえないほどの速さで走ることもできるし、
木をおもいっきり殴ってみたらへし折れてこっちに倒れてきたけど、見てから回避する事だってできた！
おっと能力を使うことを忘れてた、とりあえず頭の中で『肉体強化を維持する』と考える
そして俺は少し待つことにした。

数十分はたっただろうか、肉体強化が維持されているか試して見よう、とりあえず走ってみると、
さっきとまったく変わらない速度で走ることができた！同じように木を殴ったらへし折れたし、
見てから回避することもできた、どうやらしっかり維持されているらしい、他にもどんなのが維持できるのだろうか？
とりあえず変なポーズをして、そのポーズを維持してみた。

なんということでしょう、体を動かすことができません、これはまずい、『ポーズを維持するのをやめる』！
そうしたら体を動かせるようになった、ふうよかった、もしこんな状態で妖怪に襲われて食べられなんかしたら一生の恥だ。
そんなことを考えつつ、俺はいろいろなことを維持したりして実験することにした。

数時間後、いろいろなものを維持させることができるのがわかった。
たとえば速度、歩いている途中で速度を維持した結果、どんな体勢だろうが速度を保ったまま移動した。
ジャンプしたときに速度を保てば空を飛べるかもしれないが、降りるときどうすればいいかわからないので保留。
他にも形など、いろいろなものを維持できるが、説明すると長くなるので後にしよう。
…誰に説明するんだ？そんなことを考えながらそこら辺をぶらついている、
そうしていると何か見えてくる、そこに向かって歩くと、そこには大きな湖があった。

「おお…！」

その湖の水はとても綺麗で、魚が泳いでいるのが見えた。
俺はその水に引き寄せられるように湖に近づき、手で水を掬って飲んだ、おいしい、思わずそんな声を上げた。
俺は湖を覗き込む、そこに見えるのは真っ黒い髪をした子供、
…やっぱり、俺は子供になってしまったのか、俺はため息をついた、
そうしていると後ろから気配を感じる、…妖怪だ、見た目こそ犬の形をしているが、
そいつから得体の知れない力が出ているのを感じる、おそらく妖力というやつだろう。

「グオォ！」

「おっと危ない」

妖怪が牙をむき出しにしながら飛び掛ってきたので俺はそれを左に飛んで回避する、
そして妖怪の腹を思い切り蹴る、メキィといやな音が聞こえて妖怪は吹っ飛び、
その後ピクリとも動かなくなった。

「意外と弱かったな…」

正直言うと苦戦するかと思ってたのだが、予想以上に弱かった。
しかし、この妖怪が弱いだけで、他の妖怪たちはもっと強いのかもしれない。
もしそんな妖怪と戦うことになったら苦戦するのは確実、最悪死ぬかもしれない。

「もっと強くなる、それが今の目標か…」

そう呟くと腹から音が鳴る、そういやこの森に生まれてから何も食ってないな。
食べれそうなものは…目の前にある妖怪達を見る、意外と食べれるのかもしれない。
そう思いつつ目の前にある妖怪の首を掴んで、空いた手で腹の毛皮を引きちぎる、…気持ち悪い、
肉をちぎって口の中に入れる、見た目は悪いが旨いな、そんなことを思いつつ食べ続けた。
残ったのは骨にくっついている肉と毛皮だけだ、とりあえず毛皮を

手と足を使って伸ばして、
その伸びた状態を能力で維持する、肉がある部分に右手をつけて肉の形を変えて剥ぎ取る。
毛皮の肉をすべて剥ぎ取り終わったら近くの木にぶら下げておく、
次は骨の形を変えて食器みたいな形にしてみる、骨の皿と茶碗ができた。

そんなことをしていると眠たくなってきた、ここで寝てもいいが、
寝ている間に妖怪に襲われるかもしれない、
どうすればいいか考えた結果、近くの木にぶら下げておいた毛皮を下におろし、その木の形を変えて四角い箱にする、
そしてその木の箱の周りにある木を三本ほどへし折り形を変え、四角い箱にくっつけた。
そして大きくなった木の箱の中を空洞にするようなイメージを頭に浮かべ、形を変える、
するとどうでしょう、その木の箱はどんどん大きくなっていったではありませんか。
そしてその木の箱の外側に能力で穴を開けて中に入る、だが暗くて何がなんだかまったくわからない、
能力を使って壁に小さな穴をたくさん開ける、これで朝になればこの穴から日光が入る、
火をつかばこんなことをしなくてもいいのだが…
明日試してみるか、そう思いつつ俺は入ってきたときの穴を塞いでその辺に寝転がり、毛皮を自分にかけた。

「おやすみなさい。」

そう言って、俺は目を閉じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6019y/

東方維形録

2011年11月18日07時31分発行